兄帰る

作・永井愛

■登場人物

中村幸介（なかむら・こうすけ）……中村家の長男
中村真弓（なかむら・まゆみ）……保の妻
中村保（なかむら・たもつ）……幸介の弟
小沢百合子（おざわ・ゆりこ）……幸介の姉
小沢正春（おざわ・まさはる）……百合子の夫
中村昭三（なかむら・しょうぞう）……幸介の父の弟
前田登紀子（まえだ・ときこ）……幸介の母の妹
金井塚みさ子（かないづか・みさこ）……真弓の友人

1

明らかにナチュラリストの、明らかにインテリアにこだわった居間。
ソファセットの奥にカウンター、その奥は台所。
下手には玄関に出るドア、階段、トイレと浴室。
上手、ガラス戸の向こうは小さな坪庭。花壇やプランターの植物に、ガーデニングへの意欲が見える。
夜――保がソファにうずくまっている。玄関側のドアから、百合子がゆっくりと覗く。

百合子　（見渡し）……どこ？
保　上。とりあえずメシ食ってる。
百合子　エサまで与えたの、あんた。
保　三日も食ってないって言うからさ。
百合子　嘘に決まってるでしょう。いつもこれで始まるんじゃないの。（と、二階へ上がろうとする）
保　ちょっと待って。電話じゃ言えなかったんだけど……

保、床から革靴とスニーカーの片方ずつを持ち上げる。どちらも黒ずみ、あちこち傷んでいる。

保　これ履いてたんだ。こういう組み合わせで。
百合子　（近寄らぬままに凝視する）……
保　わかるかな、公園で暮らす人っているじゃない、兄貴、どうもそれらしいんだ……
百合子　（いったんソファに座るが、すぐ立ち上がり）牛乳ある？
保　うん……
百合子　（台所へ消える）
保　（目で追いながら）鳥取で浄水器の販売やってたんだって。ホントかどうかわかんないけど。かなり真面目に働いてたって、本人の弁なんだけどね。そこが倒産しちゃって、日雇いみたいなのもやってみたけど、それも不況で、どうにもならなくなって……
百合子　（コップの牛乳を飲みながら出てくる）
保　それで、ふらぁって東京に来たんだ。もういろんなことも時効だろって、そういう気分もあったらしいけど……まあ、郷愁だろうな。しばらくは上野公園にいたんだってよ。青いテント張ってさ。そのうち、無性にやり直したくなったって、これもありがちな流れなんだけど、それで、住民票調べて、俺がここにいるって突き止めて……
百合子　何でドアを開けたのよ。それをまず謝ってもらおうか。
保　お巡り同伴で来たんだよ。そんな場合って想定してないじゃない。ホームレスがうろついてますって誰かが通報したらしいんだ。この人、ホントにお兄さんですかって、お巡りがドングリみたいな目ぇしてさ……

百合子　お巡りなんかに怖気づいて、もう縁切ってますって、追い返しゃいいのよ。
保　できるかよ、それ、現実的に。真弓もいたんだ……
百合子　ちゃんと言っとけばいいものを、女房にまで体裁つくろってるから……
保　言ってますよ、ある程度は。行方不明だとは知ってんだし……
百合子　弥生町の件は知らないんでしょ？
保　もう済んだことでしょう。何も真弓に弥生町の件まで……

真弓がドアから入ってくる。

真弓　お義姉さん、斜めに止めたって、あんな斜めないわよ。もうホントに乗り捨てたって感じなんだから……（と百合子に車の鍵を返す）
百合子　ごめんなさい……
真弓　あれ、まだ会ってないの？
百合子　真弓ちゃん、追い出していいのよ。保の兄貴だからって同情なんかしたら、どんどんつけあがっちゃうんだからね。
保　真弓は初対面なんだ。真弓の問題にしないでよ。
百合子　何でドアを開けたのよ。アンタまだ謝ってないじゃない。あれほどの取り決めをこうも簡単に破っといて……

真弓　私が開けたの。だって私、そんな取り決め聞いてないもん。
保　悪かったよ悪かったよ。
真弓　お義姉さんも、言ってほしかったな。それほどのことであるんなら。
百合子　だって、保が言ってないのに、言っちゃ悪いと思ったから……
保　（真弓に）言ったよな、ちょっと金でトラブったって……
百合子　ちょっとやそっとじゃないでしょう！　（真弓に）アイツはね、人の物は自分の物って、それ一筋でやってきたんだから。受け入れたが最後、あらゆる物が消え果てちゃって、やだっ、権利書とか実印とか、上にあったりしないでしょうね！

保、反射的に立ち上がる。

保　（すぐ座り）やめてよ。そんなこと一度もなかったじゃないか。

真弓、階段を駆け上がる。

百合子　（真弓に）ないない、そこまでのことはなかった。
真弓　窓、開けっぱなしなんで、窓、閉めてくる……（と、また駆け上がる）
保　なぁ、言葉に気ぃつけてくれよ。

百合子　しょうがないじゃない、こうなっちゃった以上……
保　会ってらっしゃいよ、何グズグスしてんの。

百合子、階段に向かって歩き出すが、すぐに戻り、バッグを開けて口紅を塗り直す。

保　わかんねぇなぁ……
百合子　出ていけって鮮やかに言いたいからね。
保　言って済むかって、ね、追い出したら済むのかって、そういう問題だと思うんですけど、もはや……
百合子　その理屈で何度間違った？　世間体気にしてる場合じゃないわよ。
保　世間体じゃねえだろ。あのまんま放り出したら、世間の方にご迷惑だって、そっちを心配してんでしょうが。
百合子　何で急に心配する？　アイツは昨日も生きてたのよ。
保　現実的に考えてよ。一文無しだよ。ここら辺うろつかれたらどうすんの？
百合子　どこまでもほっときゃいいでしょう。
保　お巡りも知ってんだ。何で身内が面倒見ないって、そういうことになるだろが。
百合子　ほら世間体だ。そこでいっつも間違うのよ。父さんとおんなじ、母さんとおんなじ！
保　姉貴の家の近所だったら、そんなことが言えるかね。

百合子　じゃ、送ってよこしなさい。どこまでもほっといてやろうじゃないの。

真弓が階段を駆け下り、戸棚の抽斗を調べ始める。

保　何？

真弓　実印、ここじゃないよね？

百合子　ないの？

真弓　上の、寝室のチェストにしまったはずなんだけど……

百合子　チェストって、あれ？　母さんの桐のタンス改造したヤツ？

真弓　うん。保があそこなら忘れないって……

百合子　馬鹿ねえ。母さんもそこに実印入れてたわよ。

保　そうだったっけ？

百合子　ちょっとぉ……

保　形変わってるよ。今はチェストなんだから。

百合子　アイツはどこよ？

真弓　隣。畳の部屋。

百合子　隣？

真弓　まだ食事中で、「おいしいです」ってニッコリして……

百合子　ニッコリ……

保　それ、関係あるっての。

真弓　あの、もういっぺん見てくる。私、あわててたかもしれないから……（と、二階へ）

百合子　いやだなぁ……

保　変な想像やめろって。兄貴、仏壇の前でずっと泣いてたんだ。親父のことはどっかで聞いてたらしいけど、おふくろはまだ元気だと思ってたんだって。

百合子　甘いねぇ、とことん甘いわ。

保　借金はもうないらしいよ。これは仏壇の前で誓った。

百合子　じゃあるんだ。百パーセント逆なんだから。

保　ないよ。あったって関係ないでしょう。

百合子　あるでしょう。身内が払えって、いっつもそうなるでしょう。

保　払うかって。今回そこは外しちゃ駄目だ。

百合子　外すって、外すことになるんだって。

保　なるって何よ、自然現象みたいに。人様が何と言おうと払わなきゃいいでしょう。

百合子　そんなの通用しないって。

保　通用させるんだって。世間体気にしてんの姉貴じゃないか。

百合子　そう、そんなに自信あるんなら、面倒見てやりなさい。私はもう関わらない。

保　えっ、それって、そういうこと？

百合子　そうよ。アンタの希望でしょう？
保　希望じゃないでしょう。不可抗力でしょう。
百合子　追い返せたのよ。追い返すこともできた。
保　だから、あのまんま追い返したら……

真弓が戻ってくる。

百合子　ないの？
真弓　あった……（と実印を見せる）
保　どこに？
真弓　チェストの中……
保　ほらぁ、よく探せよ。
百合子　ああよかった、私ちょっと緊張しちゃった……
真弓　でも、さっきは何でなかったのか、中の物全部出して見たのに……
保　お前さ、窓閉めに行ったんじゃなかったっけ。
百合子　いやいや、私の言い方が悪かった。物がいろいろ消えるってね、アイツが直接消すってんじゃなくて、アイツに関わってしまった結果、結果として消えるという……
真弓　それ、どういう消え方なの？

保　後でゆっくり説明する。
真弓　でも、ホントに何度も何度も見たんだよ。
保　あわててたんだろ。
真弓　そうだけど、何度も見て、またしまって、また出して……（と、百合子を見るが）

百合子の視線は階段に向いている。
ゆっくりと下りてくる足。幸介の全身が現れる。いかにも路上生活者らしい姿。以下、幸介が近づくと、皆はさり気なく鼻を覆うことになる。

幸介　十六年ぶりですね……変わってないなぁ、姉さん……（と、嬉しそうに見つめる）
百合子　（反射的に口に手を当て）……
幸介　僕はこんなに変わってしまって……再婚したんですってね。おめでとうございます。いい方だそうで、あゆみちゃんともうまくいってるそうで。あゆみちゃん、大学生ですか。まだお箸をかじっていたあゆみちゃんが……
百合子　いやだぁ……
幸介　すいません。今さらお目にかかれた義理ではないんですが……
百合子　（幸介に背を向ける）
幸介　最後のお情けにすがれないかと、恥をしのんで参りました。……どうにも仕事が見つからない

んです。この格好では、面接に行くのもナンでして……空缶や、ダンボールは集められますが、それをこの先も生業といたしますのは、やや耐えがたくなりまして、新しい仕事を、新しい生活を、朝出かけて行って、夜帰る、そういう健全な生活を手にするまでのご援助を……

百合子　父さんがポックリ逝ったのアンタのせいよ！　アンタのことがなかったら……

保　姉貴、それ、後にしよう。

百合子　後はないわよ。今帰るんだから。

幸介　今度こそ、やり直します、今度こそ、今度こそ……

百合子　出たわね、今度こそが、出た出た、恐ろしい言葉が……

と、バッグを持ち、牛乳のコップまで持ち、ドアに向かう。

真弓　運転、危ないよ。送ろうか？

百合子　（ニッコリし）冷静です。さようなら。

真弓　お義姉さん、牛乳……（と、取りに行く）

百合子　あら、ごちそうさま。（と、返す）

保　冷たいよなぁ、血を分けた兄弟が、こんな姿になってんのに……

真弓　保、これさ、私たちで話そう。お義姉さんは最初から拒否してんだから……

保　人道的な問題だと言ってんの！　人間としての感じる心を、姉貴がこうも失ってんのが……

百合子　出て行けっ！　私は言ったわよ。二度と来るなっ！　野垂れ死ねっ！　私は言ったわよ、私は言ったわよ……（と、泣き出す）

保　姉貴ぃ……

百合子　いやだぁ、こんなになっちゃって……いやだぁ、慶応出てんのよ、この人……

保　姉貴、上いこ、ちょっと休もう、……（真弓に）ごめん、ホント、ごめん……（と、百合子を促して二階へ）

幸介、うなだれている。

真弓　……どうぞ、こちらへ。（とソファを勧める）

幸介　汚れますから、汚いですから……

真弓　どうぞ。

幸介　でも、気が休まらないでしょう。外に、出ましょうか。お庭で寝てもいいんです。いや、ご迷惑かな、風景として……

真弓　どうぞ、かまいませんから。

幸介　そうですか、それでは……（と、恐縮しながらソファに座る）

真弓　紅茶でもいかがです？

幸介　紅茶、いいなぁ、あ、どうも、すぐ遠慮がなくなって……

真弓、支度をしに奥のカウンターへ。

幸介　……センスの輝く家ですね。さっきから感心していました。弥生町にあった実家は、フランス人形の横に蚊取線香の箱があって、その横にアイロンが立ててあるような、言わば何でもありの家なんです。あそこで一緒に育った保が、今はこういう、対極の空間にいるというのが、まだどうも信じられませんで……収入の問題じゃないんです。この空間を維持するには、極端な話、人格を変えないと。ここにある物は、みんな選びぬかれてますものね。何でもありの性格では暮らせないでしょう。

真弓　保って、何でもありの性格でしたか？

幸介　いえいえ、そういうんじゃありませんが、あなたのご趣味なのかと、そう思って……

真弓　まあ、二人の趣味ですね。保とはわりあい一致するんで……（と、紅茶を出す）

幸介　これはまた素敵なお茶碗だ……

真弓　保と一緒に選んだんです。

幸介　ほう……（と飲み）……そこらの紅茶とは違いますね。これはいったい何と言う……

真弓　ラプサンスッチャンです。

幸介　ラプ……あなたのお好みで？

真弓　保も好きです。

幸介　あの保が、こんな家に住み、こんな紅茶を飲んでいる……

真弓　おかしいですか？

幸介　いえいえ、広告業界との付き合いも多いそうで、だんだん目利きになったんでしょう。あなたを選んだのが何よりの証拠だ。

真弓　それはありがとうございます。

幸介　あなたも、広告業界ですか？　そこで保と？

真弓　まあ……コピーライターの事務所でした。

幸介　じゃ、コピーライター？

真弓　事務所です。私はそこで事務の方を……

幸介　ああ、事務の方を……

真弓　でも、今は書いています。

幸介　コピーライター？

真弓　フリーライターです。時々雑誌の取材が入って……

幸介　ああ、取材がねぇ……

真弓　こちらのことばかり聞くんですね。

幸介　つい興味が出て。失礼いたしました。

真弓　あなたは、何をなさったんですか？

幸介　鳥取で浄水器の販売をいたしておりまして……

真弓　それは聞きました。その前です。
幸介　その前と言うと、ツアーコンダクターもいたしましたが……
真弓　十六年前です。行方不明の理由です。
幸介　ああ……ちょっと金銭のトラブルで……
真弓　ちょっとだと言う人と、ちょっとやそっとじゃないと言う人がいるんですが……
幸介　（笑い）ちょっとの方が保ですね。
真弓　どっちが正確なんですか？
幸介　ああ、後の方です、残念ながら……
真弓　つまり、ちょっとやそっとではないと。
幸介　まぁ……
真弓　どのくらい、ちょっとやそっとじゃないんです？
幸介　そういうふうに取材なさるんですね。真実を見極めようとする目だ。
真弓　おいやならけっこうです。保から聞きますから。
幸介　二千万の横領です。会社の金を二千万。
真弓　……
幸介　パチンコ、麻雀、競馬、競輪、競艇、サイコロ賭博と、こう積み重なりまして……
真弓　それの、借金？
幸介　ええ。困ると父の所へ逃げ込んで、肩代わりしてもらってたんですが、とうとう出入り禁止となりまして……横領です。
真弓　じゃ、捕まったんですか？
幸介　いえ……
真弓　まだ捕まってないんですか？
幸介　まだと言いますか、告訴されなかったんです。後で、父が弥生町の土地を手放したと知りました。きっと内々に通知が来て、それで取り下げてもらったんでしょう。
真弓　……
幸介　あれは愛情からなのか……それとも中村家の面子かな？
真弓　今は、どうなんです？　ギャンブルの方は？
幸介　やめました。きっぱりと。
真弓　きっぱりと？
幸介　（写真立てを見つけ）これが拓（ひろ）クンですか！
真弓　ええ……
幸介　精悍な目ですねぇ。ああ、この目はあなたの目だ。今のその目と同じです。
真弓　目が保似だとよく言われます。
幸介　三週間したら、会えるんですね。楽しみだなぁ……
真弓　……
幸介　もちろん、私がここにいればの話です、ここにいるとは、そんなお許しが出るとは限りません

から。でも、でも、父は嬉しかったろうなぁ……

真弓　いえ、お義父さんはもうその頃……

幸介　あれ、そうなりますか？

真弓　ええ。私が保と知り合う前に……

幸介　そうかそうか……

真弓　でも、お義母さんが可愛がってくださいました。

幸介　ああ、そうでしょう。うるさくしたんじゃないですか？

真弓　（鋭く見つめ）そうだ、お義母さんの形見の品があるんです。桐のタンス、ご存じでしょう？　あれが、今チェストになっていて、ご覧になります？

幸介　なつかしいなぁ。あれは母の嫁入り道具でして……

真弓　寝室にあるんです。さっきいらした部屋の隣に。

幸介　ああ、そうなんですか。

真弓　お義母さん、実印をあそこに入れてたんですってね。うちもそうなんです。保が、あそこがいって言い出して、無意識に見習ってしまったらしくって……

幸介　面白いですね。そういう生活の癖のようなものが、知らずに受け継がれているなんて……

真弓　お義姉さんは知ってました。はっきりと、実印があったって。

幸介　ああ、姉は一緒に暮らして長かったから……

給湯器のリモコンから短いメロディーが流れる。

真弓　……お風呂が沸きました。

幸介　これがお風呂の報せですか。

真弓　私の母が好きだったので……

幸介　へえ、あなたのお母さまが……

真弓　どうぞ、こちらです。

と、案内する。

真弓　そこです。着替えは置いてありますから。

幸介　ありがとうございます。（と、入ろうとして）あ……実印、銀行に預けた方がよろしいですよ。貸し金庫を作って預けるんです。それが一番安全です。

真弓　そうですね。盗られなかったからって、安心はできませんものね。

幸介　え？

真弓　誰かが使って戻すとか、そういう危険もあるでしょうし……

幸介　使って、戻す？

真弓　ええ……

幸介　誰かが？
真弓　まあ……不動産の売買だとか、借金の連帯保証人だとか……
幸介　ああ……
真弓　そういう書類に、実印を捺して……
幸介　はぁ……それで、元に戻すと。
真弓　まあ、たとえばですけれど……
幸介　怖いですねぇ……
真弓　何だか、今はいろいろと……
幸介　でも保は大丈夫だな。あなたのようにしっかりした人がついている。
真弓　さあ、どうですか……
幸介　いい関係ですね。保、真弓と呼び合って。私はね、女性との間にあまりいい関係を築けませんでした。
真弓　どうぞお風呂を……
幸介　ピカピカになって出てきますよ。ちょっとイイ男になってね。

幸介、微笑んで浴室に消える。

2

数日後の午後。
二階から保が下りてくる。すぐ続いて昭三。

昭三　そうかそうか、うん、そうかぁ……いや、そういうことじゃないかとは思っていたんだ……
保　僕も姉貴も当たれる所は当たってみたんですけれど……
昭三　まあ、あの年齢で再就職ってのはね。
保　もうこれは、叔父さんのお力に頼るしかないということになって……
昭三　うん、うん、それは、もう……
保　お願いしてもよろしいでしょうか？
昭三　ただ、こういうことは急ぐとねぇ。何だかんだが出てきちゃうし……
保　ええ……
昭三　かと言って、悲観ばかりじゃ始まらないが……（と、キョロキョロ）
保　（トイレを指差し）あ、そこです。その奥を左。
昭三　ま、ひとつ、暗い顔をしないで……（と、行こうとしては戻り）本当にね、凄いんだよ、人減らしが……
保　ええ、それは重々……